

「文末名詞文」の構文的位置づけ

川 島 拓 馬

1. はじめに

文末名詞文は新屋（1989）において提唱された文の類型であり、例としては以下のよう
なものがある。

- （１）川田君はすなおで朗らかな性格です。（林史典他・国語基本用例辞典）
- （２）梓川は、この前の春の時とは少し異なった感じだった。（井上靖・氷壁）
- （３）平岡はあまりこの返事の冷淡なのに驚いた様子であった。（夏目漱石・それから）

この文末名詞文をめぐるのは近年様々な論稿が出されており、研究が進められつつあると
言える。一方で、角田（1996）では「体言締め文」という構文も提唱されており、以下の
ような例が挙げられている。

- （４）太郎は明日つくばに来る予定だ。
- （５）太郎はどうしても東京へ行く気だ。
- （６）太郎は元気な様子だ。
- （７）太郎はいつも苦しい状況だ。

これ以降、上記の構文については様々な研究が行われてきた⁽¹⁾。その中では、「文末名詞
文」と「体言締め文」は名称が異なるだけで事実上同じ概念であるという前提の下で論じ
られてきた。実際、両者の例には重なる部分が多い。

しかし両研究が指向するものには大きな異なりがあり、この2つの構文を同じものとし
て扱ってよいのか疑問もある。そこで本稿では、これまで一括して論じられてきた文末名
詞文ないし体言締め文における性質の異なりを指摘し、両構文をどのように位置づけるか
について考察を試みることにする。

2. 文末名詞文と体言締め文に関する先行研究

2.1. 文末名詞文について

以下では新屋映子氏の論を取り上げて、文末名詞文について概観する。文末名詞文の規
定について、新屋（1989）は以下のように述べる。

連体部を必須とし、コピュラを伴って文末に位置し、主語と同値または包含関係のない名詞を便宜上「文末名詞」、文末名詞を持つ文を「文末名詞文」と名付けることにする。(新屋1989:p.2)

また文末名詞文は「述語名詞が主語をモノとして述定するのではない (p.2)」という点で名詞文の典型から外れると指摘される。

新屋氏は名詞文の中の一つの類型として文末名詞文を規定している。新屋(2007)では文末名詞文を措定文⁽²⁾の一種として捉え、かつ「モノをモノとして措定するのではなく、意味的には動詞述語や形容詞述語に近いようなもの (p.128)」を「措定文<2>」とし、そこに文末名詞文を含めている⁽³⁾。

2.2. 体言締め文について

以下では角田太作氏の論を取り上げて、体言締め文について概観する。角田(1996)では、体言締め文には以下のような構造が見られるとし、それを「体言締め構造」と称している。

(8) ……動詞／形容詞 (・形容動詞) の連体形＋体言＋だ。

角田氏の主張として最も重要なのは、体言締め文を動詞文や形容詞文等と比較し、他の文とは異なる独自の構文として提案することである。結論としては、一見すると体言締め文は連体修飾節を含む名詞文のように見えるが、統語的には通常の連体修飾節と異なり、動詞文や形容詞文と共通の性質を持っている、と主張している。名詞文と異なる統語的特徴には、例えばガ／ノ交替が不可能であることや主題のハが連体修飾節内に現れることなどがある。体言締め文の特徴を端的に示せば、文の前半は動詞文と同じ構造を持っているにも関わらず、後半は「名詞＋だ」で終わっているということになる。こうした理由で、角田(2011)では、体言締め文の特徴を尾は魚であるが胴体は人間である人魚に準えて「人魚構文」の名称が付されている。

2.3. 両構文の関係性について

注で言及したように、文末名詞文と体言締め文は先行する諸研究において特に区別されることなく扱われている。では実際に両構文はどの程度重なっているのかについて以下で見る。

新屋(1989)と角田(1996)ではそれぞれ文末名詞文と体言締め文で使用される名詞を分類し、その具体例を挙げている。新屋(1989)と角田(1996)における名詞の分類はそれぞれ独自に行われているが、分類項目それ自体は重なりが多数見受けられる。両者の関係性は、以下のように表にまとめられる(野田(2006)、澤田(2014a)を参考に作成)。

【表 1】新屋（1989）と角田（1996）における名詞分類の関係性

新屋（1989）	角田（1996）
A. 述部が、主語で表されたものをパラディグマティックなものの中で位置づけるもの	
B. 述部が、主語で表されたものの属性を述べるもの	6「習慣」、7「人間の性格」、8「役目」、9「体の特徴」、10「無生物の構成」
C. 主語で表されたものや一定の状況の様態を感覚的に把握して述べるもの	3「状況・結果」、5「印象・雰囲気」
D. 述部が、主語で表されたものの主観を表すもの	
D-1. 述部が、主語で表されたものの身体的感覚を述べるもの	4「感情」
D-2. 述部が、主語で表された主体の感情・心理を述べるもの	
D-3. 述部が、主語で表された主体の意思を述べるもの	1「意志」
D-4. 述部が、客観的な事象に対する、主語で表された主体の認識や意見を述べるもの	
E. 状況をより詳しく述べたり、別の角度から解説を加えたりするもの	形式名詞（こと、由）
F. 主語で表された状況の時間的または空間的な位置関係を述べるもの	形式名詞（わけ、次第）
G. 話し手が他から得た情報として事象を伝達するもの	形式名詞（ところ、最中、途中、後）
	2「段取り・見込み」
	11「疑い」

このように、いずれか片方の研究においてのみ立てられている分類項目もあるが、大半は分類として重複していると見なしてよいものである⁽⁴⁾。

これは、重複している名詞を核として、それと意味的に近い名詞を同じ分類項目に含めているためである。例えば新屋（1989）で「述語が、主語で表された主体の意思を述べるもの」とされている名詞と、角田（1996）で「意志」の類とされている名詞のうち、重複する「意向」「魂胆」「予定」「方針」などとの意味的な類似性から、いずれか片方にしか挙げられていない「料簡」「主義」「所存」「狙い」「計画」などを一括して「意志」の類型として立てているのである。こうした点から見ると、大きく見れば両者が挙げる名詞が同じような類型に収まると考えることも首肯できる。実際、後続する研究において言及されている文末名詞の外延は、新屋（1989）と角田（1996）のそれを合わせたものとなっている。

3. 統語構造上の問題

前節では文末名詞文と体言締め文に関する基本的な前提を確認した。多くの研究で両者が区別されずに扱われていることを述べたが、重要な点で両者は異なっていると考えられる。本節では、これまで一括されて扱われてきた文末名詞文ないし体言締め文における性質の

差異を、統語的な観点から指摘する。

3.1. 体言締め文の構造

新屋 (1989, 2007, 2014) において、文末名詞文の統語構造への言及は見られない。一方、角田 (1996, 2011) では体言締め文を統語的に分析する試みがなされており、以下その指摘を確認する⁽⁵⁾。

前節で述べたように、そもそも体言締め文とは名詞文の一類型ではなく、動詞文と名詞文双方の性質を併せ持った構文である。角田 (2011) では、体言締め文は以下に示すような構造を持つとされる。

(9) [節] 名詞 だ。／ [Clause] Noun Copula.

すなわち、はじめに節があり、名詞が続いて、コピュラ「だ」で終わるというものである。これを具体的な例文に当てはめると、次のようになる。

(10) [太郎は名古屋に行く] 予定だ。

(11) [太郎は今本を読んでいる] ところだ。

(12) [外では雨が降っている] 模様だ。

ここから明らかなように、角田 (2011) の言う「節」には主題「は」が含まれているが、この現象は、連体修飾節内に主題の「は」は入らないとする従来の指摘と異なるものである。更に、ガ／ノ交替現象についても特徴的な振る舞いを見せる。

(13) [明日、花子 {が／*の} 着く] 予定だ。

このように、体言締め文ではガ／ノ交替が不可能であると述べられている⁽⁶⁾。

これらの統語的現象から、体言締め文における「節」は通常の連体修飾節とは異っており、動詞文と同じ構造を持っているという。つまり、「節」の部分は統語的に動詞文と同じであるが、文末は「名詞＋だ」になっているのである。体言締め文を動詞文とも名詞文とも異なる独自の文型として設定したのは、こうした理由による。

角田 (1996) では、体言締め文の構造について「動詞または形容詞の連体形＋体言＋ダ」すなわち (8) に示した「体言締め構造」を複合述語と見る考えが提示されている。これは、角田 (2011) において次のように模式的に示されている。

(14) 明日 花子が 本を 買う 予定＝だ。

状況語 主語 目的語 (複合) 述語

ここで言う「複合述語」とは、文全体として見た際に述語に相当する部分といった意味で

あると思われる。例えば、以下のような助動詞として分析される「形式名詞+だ」の文と同様に考えることができる。

(15) 花子は 明日 名古屋に 来る よう＝だ。

(16) 花子は 明日 名古屋に 来る そう＝だ。

上記の場合、動詞文に助動詞が下接した文と捉え、「花子は」に対応する述語を「来るようだ」「来るそうだ」全体であると見なすのが通常であろう。角田（2011）では、「よう」「そう」を自立語とは見なせないものの、これらの文は体言締め文とほとんど同じような文で用いることができるとされている。

3.2. 連体修飾節の性質に関する問題

角田（1996, 2011）における体言締め文の構造に対する捉え方を先に見た。当然のことだが、そこで挙げられている体言締め文の例は全てそのように解することができるかと主張されている。新屋（1989）では文末名詞文の構造に関わる言及はないものの、自身が挙げる文末名詞文の例は統一的に捉えられると考えているようである。

しかしながら、両者が挙げる文末名詞文ないし体言締め文の用例を見ると、全てが同一に捉えられるわけではないように思われる。以下、文末名詞文ないし体言締め文においては、少なくとも2種類のタイプを区別すべきであると主張する。

具体的には、以下のような例である。

(17) 太郎は子ども達の面倒を見る立場だ。

(18) 太郎は来月会社を辞める見込みだ。

いずれも「Xは………Nだ」という同様の文構造を有しているように見える。

しかし、両者の間には歴然とした違いがある。(17)では「太郎の立場」が「子ども達の面倒を見る」というものである、と述べている。要するに、「太郎」に関して「子ども達の面倒を見る」という広義属性を述べる文であり、その属性の持ち主が主題である「太郎」となる。それに対して(18)では「太郎の見込み」が「来月会社を辞める」ことである、と述べているのではない。「見込み」の内容は、「太郎が会社を辞める」ことである。従って、この文は「太郎」について何かを述べた文であるとは言えず、これを(17)と同様に、主題である「太郎」を属性主と解することはできない。

では(18)は何を述べた文であるのか。「見込み(だ)」という述語は、「見込む」という動詞からの派生であることから明らかなように「～であると見込む」、更に言えば「～と思う」「～だろう」といった意味であると理解できる。つまり一種の認識を表していると考えられ、その認識の主体は何かと言えば話し手である「私」である。

従って、(18)の構造は以下のように捉えることができる。

- (19) a. 私は、[太郎は来月会社を辞める] と思う。
b. 私は、[太郎は来月会社を辞める] と見込んでいる。
c. [太郎は来月会社を辞める] 見込みだ。(=18)
d. [太郎は来月会社を辞める] だろう。

ここから分かるように、「～見込みだ」に対応する主題は「私」である。一方「太郎は」という主題は「辞める」という述語と対応しており、(19a, b) であれば埋め込み文における主題ということになる。(19b) を動詞文である「見込んでいる」から名詞文「見込みだ」に変えると (19c) の文末名詞文が成立する⁽⁷⁾。そしてこの文は、(19d) のようにダロウとも意味が近くなる。

ここで、(19c) に示した文構造は角田 (2011) に示された体言締め文のそれと同一である。(19a, b) における「節」は埋め込み文であり、それが名詞文である (19c) においても並行的に捉えられることから、この文における「節」は一般的な連体修飾節というよりも文相当、言い換えれば動詞文に相当すると言える。これは、角田 (1996, 2011) における主張と重なるものである。

一方で、先行研究において指摘されてきた文末名詞文ないし体言締め文の例が、すべて上記のように説明できるというわけでもない。先に挙げた (17) を例に、文構造を示すと次のようになる。

- (20) 太郎は、[子ども達の面倒を見る立場] だ。

これは (18) の文構造を (19c) のように分析したのとは異なる。主題である「太郎」は節内に入らず、通常の連体修飾節と同様に考えたものである。このように考える理由としては、「立場だ」という名詞述語に対応する主題として「太郎は」を想定することが充分可能だからである。この文で「子ども達の面倒を見る立場」を有しているのは「太郎」であり、「太郎」を属性の持ち主と見なし得る。この意味において (18) は、述部でもって主題の属性を述べる措定文と解釈できるのである。

なお、この主張は新屋 (2007, 2014) でなされたものであり、文末名詞自身は主語と意味論的關係にないが、修飾部と被修飾名詞が結合した「名詞句」として属性を叙述する機能を果たしている。新屋 (1989) でも指摘されるように、文末名詞文においては連体修飾節を除くことができないのだから、修飾部と被修飾名詞を一括して捉えることが必要である。

文構造における両者の違いは、次のような統語的テストによっても裏付けられる。とりたてて詞「シカ」は同一の最小節内で否定辞と共起しなければならない (久野1999) が、先の例文の主題をシカで取り立てると容認度に差が生じる。

- (21) a. *太郎しか子ども達の面倒を見ない立場だ。
 b. *太郎しか [子ども達の面倒を見ない立場] だ。
 (22) a. 太郎しか会社を辞めない見込みだ。
 b. [太郎しか会社を辞めない] 見込みだ。

(21a) は非文となるが、(22a) は容認される。このことから、それぞれの文構造は各 b のように示することができる。すなわち、(21) ではシカとナイが同一節内で共起していないと解釈されるが、(22) では同一節内で共起していることになる。従って、両者の違いはシカで取り立てられた部分（もとの文であれば主題部分）が節内に含まれるか否か、言い換えれば取り得る節の大きさである。よって、(17) と (18) のような一見すると同等に思われる文末名詞文に、統語構造上の差異が認められる。

まとめれば、先行研究で言及されてきた文末名詞文ないし体言締め文には、2つの異なるタイプが存在することになる。その違いは節の大きさ、すなわち節が主題を含むかどうかという統語的な差異に求められる。この主張に関して、新屋（1989）に次のような言及がある。

文末名詞文は形式的に大きく、「連体部＋文末名詞＋コピュラ」で構成された述部に対応する主語をもつものと、文の形をしたものに「文末名詞＋コピュラ」が下接した形のものとに分けることができる。（中略）後者の場合、文末名詞の所属先である論理上の主語は文脈中に求められる。（新屋1989：p.13）

この新屋（1989）の指摘は、先に述べた2種類のタイプの違いに対応する。すなわち「連体部＋文末名詞＋コピュラ」で構成された述部に対応する主語をもつものが措定文として捉えられる（17）のようなタイプで、「文の形をしたものに「文末名詞＋コピュラ」が下接した形のものが角田（1996, 2011）の言う体言締め文の構造を有する（18）のようなタイプである。ただし新屋氏は両者の差異についてこれ以上のことを述べておらず、各タイプにどのような文末名詞文が存在するのかについても言及していない⁽⁸⁾。これらの点について、以下で述べていく。

3.3. 主題の性質に関する問題

前節で、文末名詞文ないし体言締め文には構造的に2つの異なるタイプがあることを述べた。それでは、この2つのタイプの違いはどのような体系を成しているのだろうか。先ほどとは別の角度からこのタイプの違いについて考察を加えることとする。

ここでは主題の性質に着目するが、これに関しては澤田（2014a）が指摘している。澤田（2014a）では構文論的観点から文末名詞文の分類を試みており、文末名詞文の構文パターンを次のように捉えた（澤田2014a：p.81）。

< X > ハ [……………N] ダ

認知主体	—	認知内容（認知対象）	…… I 類
認知対象	—	認知内容	…… II-1 型
φ	—	認知内容	…… II-2 型

ここで認知主体とは「認知（知覚、意思、思考、判断、説明、伝聞、属性付与など）の主体」のことであり、認知対象とは「認知によって得られた情報を帰属させる対象」のことである。

先に述べた (17) と (18) における文構造の違いは、この「認知主体」か「認知対象」かの違いと大きな関係がある。まず、(17) のような文構造のタイプを構成するものとしては、認知対象を主題に取る II-1 型になる⁽⁹⁾。以下、例を挙げる。

- (23) a. 彼は転んでもただでは起きないタイプだ。
 b. 彼は〔転んでもただでは起きないタイプ〕だ。
 (24) a. 彼は素直で明るい性格だ。
 b. 彼は〔素直で明るい性格〕だ。

いずれも「彼」に対する叙述であると解することができる。新屋 (2014) で「有題叙述文」と指摘されていることも頷ける。(24) はほとんど「素直で明るい」という形容詞的な意味を述べているのであり、措定文の典型的な例であると言える。ここで「彼は転んでもただでは起きない」「彼は素直で明るい」を文相当と見なし、それに「文末名詞+だ」が下接していると捉えるのは適切でないだろう。

しかし、同じ II-1 型であっても上記のような例とは異なる文末名詞文もある。

- (25) a. 彼はこの問題が分かる様子だ。
 b. 〔彼はこの問題が分かる〕様子だ。
 (26) a. 関東地方はあす雨が降る模様だ。
 b. 〔関東地方はあす雨が降る〕模様だ。
 (27) a. 九州は桜が咲き始めた頃だ。
 b. 〔九州は桜が咲き始めた〕頃だ。

このような場合、「彼」「関東地方」「九州」に対する叙述と見なすよりも、文相当の節に「文末名詞+だ」が下接していると考えた方がよいであろう。とりわけ (26) の「模様だ」については、佐藤 (2004) によれば状況の見た目を描写しそれを報告するような場合に用いられる形式であり、「模様だ」で認識的モダリティ相当の意味を担う一つの形式と捉えるべきである。そしてこのことは、先に述べたとりたて詞「シカ」による統語的テストでも裏付けられる。

- (25) c. [彼しかこの問題が分からない] 様子だ。
- (26) c. [関東地方しかあす雨が降らない] 模様だ。
- (27) c. [九州しか桜が咲き始めていない] 頃だ。

この結果から、文末名詞を修飾する節が内部に主題を取り得る文相当のサイズであることが窺える。よって、同じ認知対象を主題に取るⅡ-1型でも文構造のタイプは先に見た(17)タイプと(18)タイプの2つがあることになる。

(18)のような文構造のタイプを構成するものとしては、主題を取らないⅡ-2型が挙げられる。

- (28) a. 大臣がお見えになった模様だ。
b. [大臣がお見えになった] 模様だ。
- (29) a. 人手が足りないというので、私が呼ばれた次第だ。
b. [人手が足りないというので、私が呼ばれた] 次第だ。
- (30) a. 犯人を見た人がいるという話だ。
b. [犯人を見た人がいる] という話だ。

文末名詞文に主題を持たないものがあるという指摘は井島(2010)でもされており、「伝達用法」と称されている。この類型は、新屋(1989)による分類の「状況をより詳しく述べたり、別の角度から解説を加えたりするもの」「話し手が他から得た情報として事象を伝達するもの」に概ね相当する⁽¹⁰⁾。

この場合、叙述内容を帰すべき主題が存在しないのだから、措定文に近い文構造を有していると考えるのは困難である。井島(2010)は「伝達用法」を「助動詞の用法」とも呼んでおり、「文末名詞+だ」が助動詞のように文相当の節に下接していると捉える方が遥かに自然である。この類型は範囲が比較的限定されており、「伝達」や「説明」といった文法的機能を担った助動詞相当の文末表現だと考えるべきである。また、(18)で挙げた「見込みだ」や、その他に「見通しだ」「運びだ」などもこの類型に含めて考えることができる。なお、ここでも主題を内部に含んだ節を想定することが可能である。

- (31) [犯人はあいつだ] という話だ。

従って、ここでの連体修飾節は文相当のものであると言える。

最後に認知主体を主題に取るⅠ類について見るが、これも(18)のような文構造を構成するタイプであると言える。例としては以下のようなものがある⁽¹¹⁾。

- (32) a. {私は／*彼は} 身体が宙に浮いている感じだ。
b. {私は／*彼は} [身体が宙に浮いている] 感じだ。
c. {私は／*彼は} [身体が宙に浮いている] と感じている。

- (33) a. |私は／彼は| 自家用車を購入する考えだ。
b. |私は／彼は| [自家用車を購入する] 考えだ。
c. |私は／彼は| [自家用車を購入する] と考えている。

これらは「感じだ」「考えだ」に対応する主題が「私」（または「彼」）となっており、感じたり考えたりする「認知」の主体である。各cの文のように、動詞述語にパラフレーズした文と同等の意味が示されている。ここでとりたて詞「シカ」による統語的テストを行ってみると、以下のような結果になる。

- (32) d. |*私しか／*彼しか| [身体が宙に浮いていない] 感じだ。
(33) d. |*私しか／*彼しか| [自家用車を購入しない] 考えだ。

上記の文が非文となることから、「私」や「彼」は同一節内にならないことになる。よって、(18)の文構造として捉えることができる。

また次のように、節内に主題を含む例も想定することができる。

- (34) a. |私は／彼は| この手術は極めて難しいという意見だ。
b. |私は／彼は| [この手術は極めて難しい] という意見だ。
c. |私は／彼は| [この手術は極めて難しい] と考えている。
d. |私は／彼は| [この手術しか難しい] という意見だ。
e. |{|*私しか／*彼しか| この手術は難しい] という意見だ。

この例では節の内部に既に主題が含まれているため、補文相当のサイズの節であることが示されている。ここでも、「私」や「彼」といった認知主体は節内には入らない。これは、(34e)が容認されないことから分かる。この(34)のように考えると、やはり(32)(33)も認知主体を節内に含まない文構造を想定した方がよいということが明らかになる。従って、文相当の節に「文末名詞＋だ」が下接したというのが(18)のような文構造であったが、認知主題を主題に取るような場合には、その主題が節の外側にあるものとして解釈されることになる。

3.4. まとめ

ここまで述べてきたことを以下にまとめる。本節では、先行する諸研究で「文末名詞文」ないし「体言締め文」とされてきた構文には文構造のタイプが2つあることを主張した。一つは、連体節によって修飾された名詞句が主語に対する叙述になっているようなタイプであり、既に指摘されているように、措定文に近い。もう一つは、文相当の節に「文末名詞＋だ」が助動詞のように下接しているタイプである。この2つの文構造のタイプは、以下のように示すことができる。

- (i) Xハ [……………N] ダ
(ii-A) [Xハ……………] Nダ

これを見れば明らかなように、後者のタイプにおける節には主題の「は」が含まれている。これは、連体節が「文」相当であることを示している。(i)は「Xハ—Nダ」という構造を基底とした名詞文である一方、(ii-A)は「文」に「Nダ」が下接しており、構造的には名詞文らしくない。寧ろ、補文が埋め込まれた動詞文に近いとも言え、これは角田(1996, 2011)で指摘された体言締め文の特徴と重なる。

なお、先に見た認知主体を主題に取る類の文の場合、事情はやや複雑になる。既に述べたように「私」や「彼」などの認知主体は節内には入らないため、この場合の文構造は以下のようなものが想定される。

- (ii-B) 認知主体ハ [(Xハ) ……………] Nダ

認知主体が節の外に出ているため見かけ上(i)タイプと区別が付かないが、先に見た統語的テストの結果から、また認知対象として別の名詞句を主題として取る場合もあることから、これとは異なる構造を有すると考える。そしてこのタイプは主題を取り得る節サイズであるという共通性によって、(ii)タイプの一種であると位置づけられる。

以上の点について澤田(2014a)で指摘された主題の性質の観点から整理すると、以下の表のようにまとめられる。

【表2】主題の性質と文構造のタイプの対応関係

澤田(2014a)による分類	I-1型	I-2型	II-1a群	II-1b群	II-2型
本稿における文構造のタイプ	(ii-B)		(i)	(ii-A)	

4. 構文としての位置づけ

本節では、前節で指摘した(i)タイプ・(ii)タイプの区別を基に、そのような区別を設けることの意義について述べる。次いで、それぞれの構文がどのような観点から分析可能であるかを述べ、それらを文法体系にどのように位置づけられるかについての可能性を指摘する。

4.1. 本稿の立場と先行研究との関連

本稿で述べた、文末名詞文の文構造には2種類のタイプがあるという主張は、筆者独自のものではない。(i)タイプの構造は、新屋(1989, 2014)の記述から必然的に導かれるものであるし、(ii)タイプの構造は、角田(1996, 2011)における主張そのものである。筆者も、両者の指摘はいずれも妥当なものであると考えている。

問題は、新屋(1989, 2014)も角田(1996, 2011)も、自らの主張に反する異質な用例を「文末名詞文」ないし「体言締め文」の範疇に入れて論を組み立てていることにある。「模

様だ」「次第だ」などが「文末名詞文」の例として挙げられ、「性格だ」「仕組みだ」などが「体言締め文」の例として挙げられているが、これらは各々の定義にそぐわないものである。3.2節で引用した新屋（1989）の記述を見ると、「文末名詞文」に異なる2つのタイプがあることは気付かれていたようだが、大きく扱われることはなく、結果的に両者に同一の名称が付されることになってしまった。

その結果、「文末名詞文」と「体言締め文」が指す範囲は極めて近接しているように見える。これを受けて、後続する野田（2006）や澤田（2014a）などの研究では、新屋（1989）の「文末名詞文」と角田（1996）の「体言締め文」を合わせた全体を「文末名詞文」の外延としてその体系を描き出している。厳密には、両者を合わせたというよりも、両者を同一のものとして区別せずに扱ったと言った方が正しい。つまり、「文末名詞文」と「体言締め文」は名称が異なるだけで、同じ構文を指すと理解されてきたのである。そうした理解に問題があることは先に述べた通りである。

既に述べたように、本稿の主張は「文末名詞文には文構造から見て2つの異なるタイプがある」というものであった。しかしながらより正確に言うのなら、この2つの異なるタイプの構文を「文末名詞文」ないし「体言締め文」という同一の名称で呼ぶことがそもそも妥当でなかったのであり、この2つのタイプはそれぞれ別の構文であると言わねばならない⁽¹²⁾。本稿の狙いは、「文末名詞文」を幾つかの類型に分類することではない。これまで「文末名詞文」もしくは「体言締め文」として規定されてきた構文の枠組みを、新屋（1989）と角田（1996）の記述に立ち返って捉え直すことにある。そして結果的に、「文末名詞文」ないし「体言締め文」の枠組みを解体し、体系を再構築するに至った。

4.2. 歴史的に見た「体言締め文」

角田（1996, 2011）が提唱した体言締め文は、見かけは名詞文だが機能的には動詞文に近く、両者の中間的な構文であるとされる。角田氏の言う体言締め文には今まで挙げたような名詞らしい名詞を述語とするものの他に、「ハズダ」「ワケダ」「モノダ」「コトダ」など「だ」を伴って助動詞と捉えられる形式名詞や、一般的にノダ文と称される「ノ」も含まれている。体言締め文とは動詞文に「名詞＋だ」が下接するという構造を有している構文なので、名詞性が低く、「だ」を伴って一語化しているような形式であっても、本質的には同等と見なすことができる。

現代語において体言締め文と捉えられる文の中には、歴史的変化を経て成立したものがある。青木（2011）では、ヨウダの構造変化を次のように示している。

(35) 春ニナレバイヅクモ花イヅクモ柳ナレバ [[錦ノミダレタ] ヤウ] 也。

(中華若木詩抄・巻上・35ウ)

(36) 今夜は^{だい}大ぶ土手が [[永] やうだ]。

(遊子方言・発端)

中古・中世の例は「連体節＋やう」という名詞句にコピュラの「なり」が下接したものと解釈されるが、近世以降になるとこれが「様子だ」という判断を表す形式として機能語化

したと捉えることができる。ヨウダの構造変化は、以下のようにまとめられている。

(37) 古典語：[連体節（連体形）＋ヤウ] ナリ。

現代語：[主節（連体形）ヨウダ]。

連体形終止が一般化したことにより、同じ連体形が、従属節の節末述語から主節述語へと再解釈された結果が上記の構造変化である。

ここで(36)で示されている文構造は、先に述べた(ii)タイプの構造と似通っている。すなわち、文相当の節に「名詞＋だ」が下接するという点で両者は統一的に捉えることができる。こうした変化は青木(2010)で「節の脱範疇化」と称されているが、こうした変化を経て成立した「ヨウダ」「トコロダ」「ノダ」などの形式と、前節で(ii)タイプとした「見通しだ」「感じだ」「模様だ」「次第だ」などの体言締め文とは、現代語において構文的に共通の捉え方が可能であると言える⁽¹³⁾。

しかし、青木(2010, 2011)でも指摘されているように、体言締め文における文末形式は、名詞が統語位置によってその性格を異にすることを示すものであって、歴史変化によって生じたものではない⁽¹⁴⁾。両者が文構造的として共通するのはあくまでも現代語という共時態においてであり、形式が出現した背景まで同一であるとは言えない。従って、(i)(ii)の文構造のタイプが(37)に示した構造変化と並行的であるからといって、(i)タイプから変化して(ii)タイプが生じたと考えるのは適切ではない。

ここで述べておきたいのは、角田(1996)が「体言締め文」とした(ii)タイプの文構造が、いわゆる助動詞類を用いた文と同様に捉えられるということである。ここで言う助動詞とは尾上(2012)の言う「述語外接形式」に相当するものであり、その名の通り述語の「外」に位置する形式である⁽¹⁵⁾。つまり「名詞＋だ」で文が終止していたとしても、それを述語外接形式と捉えるのならば、その文はもはや名詞文とは呼べないことになる。助動詞として確立した形式と比べれば相対的に名詞性を保っており、名詞文と完全には切り離せないものの、角田(1996)が名詞文とは別の類型として「体言締め文」を提案した点を重視するべきだと考える。

4.3. 「文末名詞文」と抽象名詞の関わり

新屋(1989)が提唱した文末名詞文は、述語名詞である「文末名詞」と主語との間に同値関係や包含関係といった論理関係が存在しないという点に大きな特徴があった。とは言え、文末名詞文が名詞文の体系と全く無関係に存在するわけではなく、新屋(2007, 2014)では指定文(有題叙述文)の一種であると規定された。これはつまり、連体節と被修飾名詞たる「文末名詞」が一体となることで主語に対する叙述として機能しているということである。

主語と述語の意味範疇が異なることが文末名詞文の特徴だと述べたが、「文末名詞」として機能する名詞は限られており、どのような名詞でも用いることができるわけではない。以下、澤田(2014b)による例を見る。

- (38) a. 県は、コンビニと連携して地産地消を促進しようと「計画／企画」している。
b. 県は、コンビニと連携して地産地消を促進する「計画／??企画」だ。

「計画」と「企画」は類義関係にありいずれも漢語サ変動詞として用いられるが、文末名詞文の述語として使用できるのは「計画」だけであり「企画」は用いることができない。このような文末名詞文の使用に係る制限は、未だ明らかにされていない。

構文におけるこうした名詞の振る舞いの制限に関しては、安部（2014）による「抽象名詞ハーコトダ」文の研究が関連する。「抽象名詞ハーコトダ」文とは抽象名詞を主題とし、内容を述語にして形式名詞「こと」を接続させた名詞文であり、例としては以下のようなものがある。

- (39) この船の特徴は、狭い運河も運行できることです。
(40) この方法のメリットは、コストを低く抑えられることです。

だが以下のように、抽象名詞主題文を取ると不自然な文になるものもある。

- (41) ?この物質の性質は、水とアルコールの両方に溶けることです。
(42) ?この虫の生態は、年間3回の脱皮を行うことです。

こうした違いについて安部（2014）では、「抽象名詞ハーコトダ」文が不自然になる名詞は西山（2003）の言う「変項名詞句」を形成できないと指摘されている。

このような名詞の性質に関する言及は、文末名詞文の性質を明らかにする上でも大きく関係する。「抽象名詞ハーコトダ」文を形成できる名詞はその大半が「文末名詞」として用いることのできない名詞であるという点は、注目に値する⁽¹⁶⁾。この背景にある事情に関しては未だ明らかにされていない部分が大きく、今後の分析が求められると言えよう。野田（2006）で、「〔側面・部分〕の文末名詞文⁽¹⁷⁾」に関しても、他の文型との緊張関係の分析が進めば、何かが見えてくるかもしれない（p.296）」と述べられているように、措定文や抽象名詞主題文といった構文との関係性を考慮に入れる必要がある。（i）タイプの文構造を有する文末名詞文に対しては、名詞の統語的な振る舞いの観点から更なる考察が望まれる。

5. おわりに

本稿では、先行研究で「文末名詞文」または「体言締め文」と呼ばれてきた構文に、文構造の点から見て異質な2種類のものが混在していることを指摘した。そのため、措定文との連続性から捉えるにしても、名詞由来の助動詞類との共通性から捉えるにしても、統一的な説明が難しかった。そこで本稿で（i）タイプ・（ii）タイプとした文をそれぞれ別個のものと考えることにより、構文ごとの性格を明確に規定することができた。更に、

両タイプの文がどのような言語現象と関連があり、またどのような観点から捉え得るのかについても述べた。

筆者の狙いは、「文末名詞文」ないし「体言締め文」を日本語の構文の中に適切に位置づけることにある。本稿で両構文の本質的な差異に言及したのも、このためである。もちろん、本稿で指摘した2つのタイプの位置づけは充分なものではなく、広範な視野の下での考察が必要である。とりわけ、文構造の2つのタイプを分けるポイントについてはより明確かつ具体的に記述する余地があると考えている。全体的な見通しから個別形式に至るまで、残された問題は多い。最後に述べた、関連する言語現象や捉え得る観点はそのまま今後の展望であり、課題であると言える。

【注】

- (1) 代表的な研究には、野田 (2006)、井島 (2010)、井上 (2010)、ダムディンジャブ (2011)、澤田 (2014a, b)、谷守 (2014) などがある。これらは「文末名詞文」「体言締め文」のいずれかの名称を用いているが、特に両者を区別しているわけではない。この他にも、部分的に文末名詞文への言及が見られる研究も多くあり、また文末名詞文の中の個別具体的な形式について論じた研究も見られる。
- (2) ここで言う「措定文」とは、上林 (1988)、西山 (2003) などで提起された名詞文の類型に相当する。「文が「AはB。」の形を取って全体がAとBに二分され、Aを主題としてBでその属性 (広義) を述べるもの (新屋2014: p.112)」のように定義される。
- (3) 新屋 (2007) の再録である新屋 (2014) では「措定文」の語が「有題叙述文」に変更されているが、規定の仕方は同様である。
- (4) ただし語数の点から見ると、新屋 (1989) と角田 (1996) で挙げられた名詞は異なりで153語あるが、そのうち重複しているのは47語に留まる。
- (5) 角田 (2011) では「人魚構文」の名称が用いられているが、本稿では「体言締め文」に統一する。
- (6) 文末名詞文においてガ／ノ交替が起きない、または起きにくいという指摘は新屋 (1989) でもなされている。また澤田 (2014a) によれば、文末名詞文にはガ／ノ交替を成立させるものとそうでないものが存在する。
- (7) ただし、動詞文において顕在化していた「私は」は、名詞文にすると顕在できなくなる (*私は、太郎は来月会社を辞める見込みだ) ことには注意が必要である。
- (8) 新屋 (1989) における文末名詞文の2つの区別が角田 (1996, 2011) の体言締め文と関係することについては、新屋 (1989) を再録した新屋 (2014) でも触れられていない。
- (9) 澤田 (2014a) ではⅡ-1型について、「「XのN」と言え、ガ／ノ交替が成立する」ものをⅡ-1a群、「「XノN」と言えず、ガ／ノ交替が成立しない」ものをⅡ-1b群と称している。
- (10) 主題を持たない文末名詞文に関しては、無主語文について論じた新屋 (2013) にお

いて「無主語名詞文の過半数を占める文脈内陰題文は広義措定文である (p.10)」と述べられている。ここでは、先行する諸研究における「文末名詞文」の外延を問題とするため、こうした類型も文末名詞文の範疇に入るものとして考えることにする。

- (11) (32) と (33) の違いは主語の人称制限の有無であり、澤田 (2014a) では人称制限のあるものを I-1 型、ないものを I-2 型と称している。
- (12) 本稿で指摘した文構造のタイプが、必ず截然と 2 つに分けられるのかどうかについては慎重にならざるを得ない。(i) タイプと (ii) タイプは少なくとも外形的には似通っており、あらゆる例が確実にいずれかのタイプに振り分けられるとまでは言えず、解釈が曖昧になる可能性もある。だが統語構造の観点から見れば両者は別の構文であり、区別して捉えるべきである。
- (13) 角田 (2011) の「人魚構文」を通時的観点から記述・分析した研究に坂井 (2013) があるが、そこで人魚構文として挙げられているのは「やう／さま／けしき／げ／ばかり／のみ／こと／もの＋コピュラ (なり／ぢや等)」など、現代語では名詞性が捨象された形式がほとんどである。ここからも、(ii) タイプの構造を持つ「体言締め文 (人魚構文)」と、名詞由来の助動詞を有する文 (形式名詞述語文) との間に関連性があることが窺える。
- (14) だが、歴史変化を経て生じた形式が全く無いのかという点に関しては、疑問も残る。例えば「模様だ」は名詞性が薄れることによって機能語化しているように思われるが、これについては別稿で述べたい。
- (15) ただし尾上 (2012) の言う述語外接形式は非現実領域事態について語るものに限定されるため、「次第だ」「塩梅だ」などは述語外接形式に含まれないことになる。こうした形式の位置づけに関しては今後の課題としたい。
- (16) ただし、「計画」に関しては「県の計画は、コンビニと連携して地産地消を解消することだ」のように「抽象名詞ハーコトダ」文が構成できる。「予定」「狙い」なども同様である。
- (17) 野田 (2006) では、「XノN」が言える文末名詞文を「側面・部分」を表すものと捉えている。

【参考文献】

- 青木博史 (2010) 「名詞の機能語化—形式名詞を中心に—」『日本語学』29-11, pp.40-47, 明治書院
- 青木博史 (2011) 「述部における名詞節の構造と変化」青木博史 (編)『日本語文法の歴史と変化』pp.175-194, くろしお出版
- 安部朋世 (2014) 「抽象名詞の内容を表す「抽象名詞ハーコトダ」文」『日本語文法学会第15回大会発表予稿集』pp.79-86
- 井島正博 (2010) 「名詞述語文をつくる名詞句—形式名詞述語文の成立根拠を考える—」『日本語学』29-11, pp.48-57, 明治書院

- 井上優 (2010) 「体言締め文と「いい天気だ」構文」『日本語学』29-11, pp.58-67, 明治書院
- 尾上圭介 (2012) 「不変化助動詞とは何か―叙法論と主観表現要素論の分岐点―」『国語と国文学』89-3, pp.3-18, 明治書院
- 上林洋二 (1988) 「措定文と指定文：ハとガの一面」『文藝言語研究 言語篇』14, pp.57-74, 筑波大学
- 久野 暉 (1999) 「「ダケ・シカ」構文の意味と構造」アラム佐々木幸子 (編)『言語学と日本語教育―実用的言語理論の構築を目指して―』pp.291-319, くろしお出版
- 坂井美日 (2013) 「日本語における準体述語文と人魚構文の歴史―上代から中世末にかけて―」『待兼山論叢』47, pp.75-92, 大阪大学大学院文学研究科
- 佐藤琢三 (2004) 「「模様」の報告用法について」『国語学』55-4, pp.73-84
- 澤田浩子 (2014a) 「「文末名詞文」の構文論的分析から見た分類」『日本語学会2014年度春季大会予稿集』pp.79-86
- 澤田浩子 (2014b) 「知覚・思考・判断・意志を表す「文末名詞文」の使用実態―コロケーションから文型へ―」『日本語／日本語教育研究』5, pp.57-73, ココ出版
- 新屋映子 (1989) 「「文末名詞」について」『国語学』159, 左pp.1-14
- 新屋映子 (2007) 「随筆の名詞文」高崎みどり・新屋映子・立川和美著『日本語随筆テキストの諸相』pp.121-184 (第4章), ひつじ書房
- 新屋映子 (2013) 「日本語の無主語文をめぐって」『言語教育論叢』9, pp.1-14, 桜美林大学言語教育研究所
- 新屋映子 (2014)『日本語の名詞指向性の研究』ひつじ書房
- 谷守正寛 (2014) 「体言締め文における主題と文末名詞との関係について」『言語と文化』18, pp.157-175, 甲南大学国際言語文化センター
- ダムディンジャブ・アルタンツェツェグ (2011) 「文末名詞文に関する一考察―文末名詞の分類をめぐって―」『指向』8, pp.37-43, 大東文化大学大学院外国語学研究科日本言語文化学専攻
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」鈴木泰・角田太作 (編)『日本語文法の諸問題：高橋太郎先生古希記念論文集』pp.139-161, ひつじ書房
- 角田太作 (2011) 「人魚構文：日本語学から一般言語学への貢献」『国立国語研究所論集』1, pp.53-75
- 西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論―指示的名詞句と非指示的名詞句―』ひつじ書房
- 野田時寛 (2006) 「複文研究メモ (7) ―文末名詞をめぐって―」『人文研紀要』56, pp.275-299, 中央大学人文科学研究所

【付記】

本稿執筆にあたり、筑波大学の澤田浩子先生より直接の議論を通じて多くのご指摘を頂いた。記して心より感謝申し上げる。また、草稿段階から有益なコメントを下された大江元

貴氏、井戸美里氏にも深く御礼申し上げます。

（かわしま・たくま 筑波大学大学院人文社会科学研究科一貫制博士課程在学）